Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第2回 井上和子神田外語大学第2代学長

新しい試み、その可能性にかける

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

昭和62（1987）年、千葉・幕張に神田外語大学が開学しました。初代学長は英語教育界の重鎮、小川芳男先生。しかし、小川先生は平成2（1990）年7月に学長在職のまま逝去されました。第2代学長に抜擢されたのは英米語学科教授の井上和子先生でした。著名な言語学研究者である井上先生は、なぜ神田外語大学で教え、学長をお引きうけになったのでしょうか？今も大学院で指導を続ける井上先生に当時のエピソードについてお聞きしました。

昭和60（1985）年3月、私は22年間勤めた国際基督教大学（ICU）を定年退職しました。翌年度からは、母校である津田塾大学の教授となり、言語学研究所の所長として、大学院で教えることになっていました。

ICUからの退職が決まったとき、いくつかの私立大学から声をかけていただきました。でも、大学で教えるのはもういいかなって、終わりにしようと思ってたんです。津田塾はある事情があって、私が行かなければ英文科のポストが他の学部に移されてしまう。だから行かざるをえませんでした。

津田塾に行くことが決まったのと同時ぐらいに、神田外語大学の設立の準備をしていた小池生夫先生から教授職へのお誘いがありました。初代学長である小川芳男先生が推薦してくださったようです。学会などで精力的に活躍されていた小川先生とはずいぶんと以前からおつきあいがありました。津田塾の先輩が小川先生の一番弟子の方とご結婚されていたことや、先生が勲章を受章されたときにはお祝いの会を企画したりと、個人的なご縁もありました。

小川先生は、言語学も英語学もできる優秀な方でしたが、知識をひけらかすようなことは一切ありませんでしたね。徹底的に英語の先生でした。日本語教育にも力を入れておられ、海外への教育視察の団長もされていました。穏やかだけれど、言うべきことはきちっと言う。素晴らしい人格者でしたね。

小川先生はこんな言葉で誘ってくれました。「井上さん、神田外語大学は過去を踏襲するのではなく、新しい試みをする可能性のあるところです」それはちょっと面白そうだなって。津田塾には少なくとも3年間勤める約束をしていたので、神田では開学の翌年から教えることにしました。小川先生の考えてらっしゃった神田外語の将来というものに、可能性を感じたんです。小川先生のことだからきっと芯のある語学教育をするだろうと。だから新しい大学で教える不安より、楽しみの方が強かったと記憶しています。

佐野隆治会長（当時は事務長）にお会いしたのもその頃です。会長もずいぶんと小川先生を頼りにされていましたよ。小川先生もその思いに応えたいという気持ちがあった。佐野会長は最初にお会いしたとき、ご自分の教育理念についてのスタンスについてはあまりお話をされず、私の話をずっと聞いてくださいました。そしてただ、「やりたいことを自由にやってみてください」と言ってくださいました。（1/5）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

第2回 井上和子神田外語大学第2代学長

新しい試み、その可能性にかける

最初はお断りしました。学長は出来ないって。研究ができなくなってしまう不安があったから。

開学の翌年、昭和63（1988）年から神田外語大学に勤め始めました。英米語学科の教授です。神田にはタレントのある先生方が集まっていましたね。一般教養では古田暁先生が高い見識を持って優秀な先生方を集めていた。それはすごい勢力でした。英米語学科は先生はたくさんいるけど、とてもおとなしい方ばかり。韓国語学科は小さいけれど濱中昇先生をはじめ筋の通った先生が多い。そして、中国語学科には、体当たりで意見を言ってくる先生も多かった。小川先生はしんどかったでしょうけど、よくまとめておられたと思いますね。

気がかりだったのは小川先生のお体です。私は開学前から神田外語大学で働くことが決まっていたので、初めての入学式にも招かれました。小川先生は、その時から、お腹に水が溜まってしまっていたようで、「妻とふたりでモーニングのズボンを引っ張って、引っ張って、やっと入ったよ」って冗談のように言っておられたのを覚えています。

病気が悪化してからも大学にはいらっしゃっていました。さすがに電車では通えないから大学がハイヤーを用意していました。ただ、成城のご自宅から幕張まで自動車で通うのも辛かったと思いますよ。大学に来られないときは、永年秘書を務めてこられた宮森さんという方が小川先生のご意見を聞いて、現場で指令を出していました。あの人はよくやりましたね。（※1）

平成2（1990）年7月、小川先生がお亡くなりになりました。

慈恵医大に入院されていたとき、小川先生から会いたいと連絡がありました。面会に行ってみると「井上さん、頼む、頼む」っておっしゃるんです。そのときは、何を頼まれているのか、分かりませんでした。お腹に水がたまってしまうというので、私は「先生、大丈夫ですよ。水を採ればよくなりますよ」って励ましました。けれど先生は「いくら採っても次から次へとたまってしまうんだ」と、どこか冷静で、そして諦めていらっしゃったようです。

病室で小川先生に「頼む」と言われました。私は、神田外語大学に就職した後、小川先生が兼任されていた英語学科長の役職を引き受けていました。だから、私はそれを「頼まれた」と思っていたんです。でも、小川先生が学長在職のまま亡くなると、当時理事長だった佐野隆治会長から、学長を引き受けてほしいと言われました。そのときに、「ああ、小川先生が理事長にそうおっしゃったんだ」と直感的に思いました。

最初はお断りしました。学長は出来ないって。家族も友達も反対しました。中国語学科の先生方をまとめるのはしんどいし、何しろ研究ができなくなってしまう不安があったからです。
ただ、ひとつ魅力的だったのは、当時、神田には言語学研究の大学院構想がありました。大学はいい学部を持っていても、大学院がきちんとして、専門家を輩出していなければ一人前ではありません。ただ大学院は、学生数は少ないけれど一定の教員数を満たさなければならない。経営的にはマイナスです。それでも佐野会長は理事長として、大学院で勝負しなければいけないとお考えになっていたようです。大学院の整備をさせていただく、それが学長を引き受けた大きな要因でした。（2/5）

1. 小川学長の秘書をしていた宮森氏は、小川氏の死去の後ほどなくして、癌を発症し、急逝されたという。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第2回 井上和子神田外語大学第2代学長

新しい試み、その可能性にかける

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

文化をきちんと心得ていないで、言葉だけをロボットみたいに練習しても意味がありません。

学長となって力を入れたことは教員が研究できる環境づくりでした。ELI（English Language Institute）にはネイティブの教員がたくさんいて、彼らには研究したいという意欲がありました。研究活動は大切であり、育てなければなりません。彼らにとっても研究業績は大切です。私は彼らの研究と学会での発表を支援しました。一生懸命勉強したネイティブの教員は海外で優秀な発表をして、そして任期を終えると有名な大学へと就職していきました。

ELIのネイティブの教員は3年の契約で、どんどん人を入れ替えながら、教員を養成していきました。ELIには、新しい人材を登用し続けることでそのカリキュラムを開発し続けるという狙いがあったからです。優秀な教員を育成するという点では社会のニーズにも応えていたでしょう。でも、個人的にはもったいないと思っていましたよ。もっと働きたいと心を神田に残しながら、日本を去っていくネイティブも多かった。だから私が学長をしているときは、相談されると、できるだけ国内の勤め先を紹介しました。（※2）

サバティカル（研究休暇）を設けたのも私が学長になってからです。当時、英米語学科で教えていた久泉鶴雄先生や原岡笙子先生はこのサバティカルを活用して、素晴らしい研究をされましたね。

この久泉先生と原岡先生が英米語学科の立役者でした。私が学長に就任した当時、英米語学科のカリキュラムは専門課目が体系的ではなかったのです。あまりにもカジュアルでした。カリキュラムを作った先生方は喫茶店でコーヒーを飲みながら考えたというんですから。学生が英米語学科で4年間学んで卒業するときに、英語に加えて何か専門的な知識がなければ、別の大学の大学院に行くにも、就職するにも不利だと私は思ったんです。

そこで、久泉先生と原岡先生とともに会議室に１週間ほど缶詰になって専門課目を組み直しました。まず、副専攻というアイデアを出しました。主専攻は語学で、副専攻として語学を通じて専門知識を学ぶという考え方です。それを基にして、授業の内容を「コンテントベース」に置き換えていきました。内容（コンテント）を中心に置いた英語のプログラムです。従来の課目を一つずつ直していきました。とても時間がかかる作業でした。

いくつかの課目では文化的な内容を重視しました。英語を学ぶうえでは、文化を学ぶことが重要です。文化をきちんと心得ていないで、言葉だけをロボットみたいに練習しても意味がありません。（3/5）

2. 現在は神田外語グループの教育ソリューションを提供する熊本や広島の大学でELIネイティブの教員の継続的な雇用が可能となっている。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第2回 井上和子神田外語大学第2代学長

新しい試み、その可能性にかける

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

学部教育もユニークで、大学院の研究にも熱心。神田外語はバランスのよい大学になりました。

大学院については、平成4（1992）年に言語科学研究科で博士前期課程を設置し、2年後の平成6（1994）年には博士後期課程を設置しました。言語はヒトの本質です。言語とは何かという問いかけは、ヒトとは何かという問いかけでもあるのです。英語と日本語の研究を中心に、言語学の本質に迫り、言語教育のあるべきかたちを探求することを、研究のテーマとして掲げました。

大学院を高めるのに役立ったのは文部省（当時）のCOEです。"Center of Excellence"（卓越した研究拠点）といって、重要な研究を行う可能性を持つ大学院が受けられる研究費の助成です。人文の分野でCOEをいただいたのは神田外語大学が初めてでした。当時の学術審議会の委員長は天満美智子先生。津田塾大学の学長を務められた方です。天満先生は大学へ視察に来られて、COEの取得を支援してくださいました。

平成12（2000）年12月に開催した「COE国際シンポジウム」をはじめ、COEのおかげで、海外から著名な先生を数多くも招くことができました。このプロジェクトは後に言語科学研究センターとして独立して、さまざまな角度から言語と言語研究に関する研究を行う機関となりました。

神田外語大学の大学院からは数多くの博士たちが誕生しました。博士課程を修了しただけでなく、きちんと論文を書いている博士が多いことが評価される理由です。

私自身、論文で博士号を取得しました。31歳のときにフルブライト留学制度の前身のガリオア・プログラムでアメリカに留学しました。まさか受かると思っていなかったので、留学先も考えていませんでしたが、カリフォルニアのミルズ大学で文学を学ぶことになりました。興味があったので、独学で言語学の専門書を読破しました。その中に、アメリカ構造主義言語学の祖、ブルームフィールドの著書"Language"があったのです。その後も奨学金をいただきながら、ミシガン大学の修士課程で"Teaching English as a Foreign Language"（外国語としての英語指導）を学びました。

ミシガン大学には当時、フリーズ先生やラド先生といった外国語としての英語指導の分野で世界的な権威がいらっしゃいました。ラド先生もこの分野で博士論文を書くことを勧めてくれました。でも、ブルームフィールドの "Language"が忘れられず、博士論文は言語学で書きました。そんな経験もあって、神田の大学院でも論文博士の養成には力を入れてきました。神田はいろいろな大学から優秀な人を集めてどんどん論文博士を出していけばいいと思いますよ。

神田外語大学出身の研究者は海外でも認められているし、国内の大学でも要職に着き始めました。言語学者のチョムスキーをはじめ、海外の著名な研究者も来日するとこの大学で講演をしてくれます。学部教育もユニークで、大学院の研究にも熱心というバランスのよい大学になりましたね。
私は学長を7年間務め、平成9（1997）年に石井米雄先生にバトンタッチしました。石井先生はポリグロット、語学の天才でした。いくらでも外国語を覚えられる。私なんて理論ばかりで、できる言語なんて限られています。石井先生はアジアの言語が強くて、タイ語などは托鉢（たくはつ）しながら覚えたそうです。私とは対照的で、英語以外の言語で造詣の深かった石井先生が学長に就任して、神田は外国語大学としての幅や多様性が広がっていきました。

学長を辞めた後も大学院の教育は任せていただきました。大学院では理論を中心として、英語教育と日本語教育に重点を置きながらプロを育てるというかたちを貫きました。平成13（2001）年には言語科学研究センターが設置され、私は顧問に就任しました。今でもゼミを持っています。学校に行く日は、朝から夕方まで学生たちの論文を見たり、ディスカッションをしたりしていますよ。（4/5）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第2回 井上和子神田外語大学第2代学長

新しい試み、その可能性にかける

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

学生のモティヴェイションを高める環境がある。その気になったら、放っておいても勉強しますよ。

神田外語大学には学生のやる気を引き出す環境が整っています。外国語の勉強を机上の空論にせずに、文化的な背景まで整えて学生に提供するなんて、とても贅沢な教育です。7号館の多言語コミュニケーションセンター、そしてブリティッシュヒルズには本物の外国の環境があります。

語学の勉強はつまらないことも多いのも事実です。パターンプラクティスといって、何度も繰り返したり、置き換えたりして言葉を覚えていきます。そんな勉強に疲れたとき、外国の環境を再現した空間のなかでふっと息を抜き、学んだ外国語を口にしてみる。その雰囲気のなかで言葉が出てきたら、「あ、自分のものになったな」って体感できるのです。それが学生のいいモティヴェイションになる。学生はその気になったら、放っておいても勉強しますよ。

佐野隆治会長はそこをきちんと理解されています。やる気を出させるテクニックを持っている。現場で働く教員の方々には、そういった経営者の考え方を徹底させなければならない。非常勤の先生方も含めて、きちんと理解して、その理念のもとに作られた神田外語大学の環境を教育に活用してほしいですね。学期初めのオリエンテーションで白河のブリティッシュヒルズに行きます。ある人が「こんな贅沢するんだったら、授業料を安くしたほうがいい」と言っていました。その方は何も分かっていない。とんでもないですよ。外国語の学習では、学ぶ環境、とりわけ外国の言葉が自発的に出て来る環境づくりが非常に大切なんです。

神田外語ももうすぐ創立25周年ですね。卒業生は広い分野で活躍されている。卒業後に海外へ留学した人も多くいるでしょう。そういった卒業生をもっと巻き込んでいけば、大学はもっとよくなる。外からの視点が大切なんです。それと学生が講義を評価することも大切。海外の大学では当たり前のことですよ。私が学長のときは先生方の反対で実現しませんでしたけど。大学が自らを省みる機会を持つことが、成長につながっていくと私は思いますね。

ここまで神田外語大学でやってきて、本当によかったと思います。この縁をくださった小川芳男先生は、あんなに病気をしていたのに無理をしながらも一生懸命やっておられました。それはきっと神田外語の理念に賛同されて、こういう外国語大学ができたらいいなと思われたんですよ。そういった方々の想いの上に成り立っている神田外語グループですから、これからの50年もぜひ頑張っていただきたいですね。（5/5）

井上和子（いのうえかずこ）
大正8（1919）年大阪府生まれ。津田英語塾を卒業後、高校の非常勤講師を続けながら、公費留学でアメリカの大学で学ぶ。昭和39（1964）年にミシガン大学で言語学博士号を取得。国際基督教大学、津田塾大学で教鞭を執った後、昭和63（1988）年に神田外語大学教授に就任。平成2（1990）年～平成9（1997）年は第2代学長を務める。学長退任後も言語科学研究センター顧問として大学院教育に力を注ぎ続けている。
平成29（2017）年5月永眠。享年98歳。